

## 第2回 アクティブ・ラーニング研修会実践報告

日時 平成29年9月25日(月)  
場所 本校 桔梗会館  
参加者 本校職員36名  
県教委教育研修課から2名、各務原西高校、大垣南高校、中津高校、斐太高校より合計7名の先生  
講師 関西大学 教育推進部 森 朋子 教授  
演題 「学力」を保証するAL授業デザイン



### 講義内容

今回の研修では、「わかる」のプロセス、「教える」と「学ぶ」の関係性の理論からアクティブ・ラーニングを取り入れながらどのように授業を進めるかというテーマで、関西大学の森先生に講義をしていただいた。

「教える」と「学ぶ」のバランス関係について、「教える」ことに重視をすればいいと思いがちであるが、実は実証データによると非効率である。いくらこちらが教える気が高くても、教える時間が長くても、受講者の成績はそう変化しないということ。この非効率なサイクルの脱却として、「学ぶ」という比重を高くするだけでこの問題を解消できる。

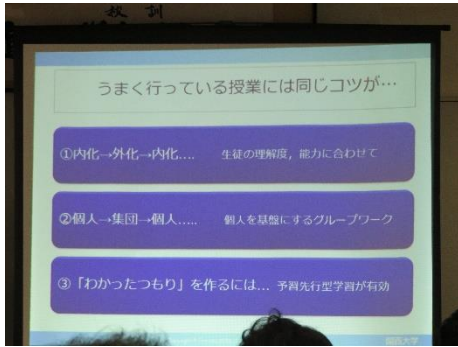


関西大学 森朋子先生

認知的学習論に基づくと、学習は①主体的な行為、②知識の変容、累加、再構造化③先行知識によって導かれる。つまり、自分自身で理解する場面を作らない限り学習はうまく進まないということである。従来の教育では、知識の詰め込みがなされてきたが、時代はコンピュータ、AIが人間よりはるかに高い精度で知識の蓄積、検索が可能となった。企業側も採用するにあたり、知識ではなく、即戦力となる人材を求めている。この即戦力とは何を意味するか、これは見えない力、見えにくい力を指す。具体的には、知識や技能の獲得・活用能力、思考力、表現力、対話学ぶ力を中心とする学ぶ力、関心・意欲・感性・自己肯定感を中心とする「学ぼうとする力」である。

これらの評価は、試験でなかなか測定しづらく、現場としても大学入試が変わらな

い限り、授業中でそうした部分を育てる時間が確保できない。そんな中、今回の学習指導要領の改編で以前のものと比較して大きく異なる点は、大学入試に直結していることである。高校の出口が変われば、自ずと生徒も教員も保護者も、納得して取り組めるチャンスと捉えることができる。



内化と外化のプロセス

アクティブ・ラーニングは、これらの要求される力を補うツールとして有効である。ただし、深みのないディスカッションや活動だけアクティブになっているのでは、成績は上がらない。「インプット」つまり「分かった」、分かったつもりの活動「内化」の作業とアウトプットしていく中で経験する躊躇・葛藤・疑問・失敗といった「外化」の作業の往復が欠かせない。このサイクルにグループ活動をうまく取り入れることで個人の分かったへ落とし込む構造が実現できる。今回の研修ではさらに具体的な手法を紹介してもらえ、受講者アンケートでも後期の授業へ活用したいという多くの声が寄せられた。

講義後半では、前述した「内化→外化→内化」のサイクルや「個人→グループ→個人」の流れをどう授業に組み入れるか、授業デザインを同じ教科の先生に集まって検討した。簡単に指導案を作り、グループでアイデアを出し合い、さらにワールドカフェ方式で他教科の先生も交えて、アイデアを共有し、改善する流れを実際行った。



授業デザインの作成



授業デザインの共有

生徒達の学びをいかに豊かなものにしていくか、知識の伝達だけに執着しない授業をどう展開していくか、今回の研修も多くの先生に満足いくものであった。多治見高校の進めるアクティブ・ラーニングの深化が一層高まったように思われる。